

海外派遣研究助成事業による研究の成果

| | |
|---------------------------------------|--|
| 研究者氏名 | 八木 秀祐 |
| 所属機関 | 国立国際医療研究センター |
| ・研究に従事した 外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名 | ESMO World Congress on Gastrointestinal Cancer 2023 第25回世界消化器癌学会 |
| 渡航期間 | 自 2023年6月27日 至 2023年7月2日 |
| ・研究内容 ・国際学会・会議内容 | Poster Session Title : Risk factors for early recurrence after radical gastrectomy followed by adjuvant chemotherapy for Stage II or III gastric cancer: A multicenter, retrospective study |

研究成果 （ 要約：800字 ）

今回、バルセロナにて開催された ESMO World Congress on Gastrointestinal Cancer 2023 に参加し、Poster session にて発表を行いました。本研究の内容は、根治胃切除術後に術後補助化学療法を行った後の早期再発のリスク因子を明らかにすることです。東アジアを中心としたアジア諸国では Stage II/III の胃癌に対して、根治胃切除と術後補助化学療法が標準的な治療です。術後補助化学療法中もしくは補助化学療法終了後半年以内の早期再発は予後不良と報告されているが、早期再発のリスク因子に関してはいまだ不明であり、日本臨床腫瘍研究グループ胃がんグループの6施設の多施設共同、後方視的コホートにて、早期再発のリスク因子解析を行いました。結果としては、Cox 比例ハザードモデルにより、術後血清 CEA \geq 5ng/mL (HR 2.257, 95%CI 1.105-4.607) と好中球-リンパ球比 (NLR) $>$ 1.8 (HR 2.231, 95%CI 1.345-3.699) は独立した早期再発のリスク因子であった。NLR の再発に対するハザード比は時間の経過とともに有意に減少し ($p < 0.001$)、CEA も同様の傾向を示した ($p = 0.08$)。結論としては CEA \geq 5ng/mL および NLR $>$ 1.8 は、Stage II/III 期の胃癌に対する根治的胃切除術および術後補助化学療法後の早期再発を予測するための有用なバイオマーカーである可能性が示唆されました。

今学会の参加を通じて、ヨーロッパでは周術期化学療法が標準治療であることを改めて強く実感しました。ヨーロッパから発表される研究内容では、周術期化学療法の強化による予後延長効果や、それによる予後因子解析などが多く発表されており、広い知見を学ぶことができました。また、異なる治療戦略であるからこそ、国際学会にて本邦での治療成績や研究成果を発表し世界のエキスパートに知ってもらう必要があると感じました。

今回、貴財団からの助成により学会参加させていただいたことで、とても貴重な経験ができました。この経験を今後の研究に活かし、有意義なものにしていきたいと思っております。この度は誠にありがとうございました。